

慶安五年刊『訳和和歌集』翻刻と解題 附校異 (三)

内野, 優子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8977>

出版情報 : 文献探究. 41, pp.74-96, 2003-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

慶安五年刊『訳和歌集』翻刻と解題

附校異 (三)

内野 優子

一 『訳和集』に見える性空上人歌

『拾遺集』卷第二十 哀傷（一三四二番）^{注1}

性空上人のもとに、よみてつかはしける 雅致女式部

暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙に照せ山のはの月

『法華経』化城喻品の「從冥入於冥 永不聞仏名」を踏まえた、和泉式部のあまりに有名な右の歌は、後の歌合・私撰集・類題歌集・名所和歌・さらには、古注釈や辞典類に至るまで、数多の作品に引用されている。そしてまた一方では、時代が下るにつれ、御伽草子化が進み、道命阿闍梨との母子相姦といった、荒唐無稽といわざるを得ない和泉式部像が形成され、その話の中で、書写山の性空上人の弟子となつた式部が、六十一才の時、鎮守の拝殿の柱に、この「くらきより」の歌を書き付けるというあらすじに変容していく^{注2}。

抑も『無名草子』^{注3}においては、

書写の聖のもとへ、

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

と詠みてやりたりければ、返しをばせで、袈裟をなむ遣はしける。さて、それを着てこそ失せはべりにけれ。そのけにや、和泉式部、罪深かりぬべき人、後の世助かりたるなど聞きはべるこそ、何事よりもうらやましくはべれ」：

と評され、『古本説話集』^{注4}でも、

また、書写の聖の許へ、

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

と詠みてたてまつりたりければ、御返事に、袈裟をぞつかはしたりける。病づきて失せむとしける日、その袈裟をぞ着たりける。歌の徳に後の世も助かりけむ、いとめでたき事。

というように、和泉式部が、歌徳を以て性空上人の導きを得、極楽往生できたことを賞賛している。

『無名草子』においても『古本説話集』においても、和泉式部は、直接、性空上人の許を訪れてはいない。又、前者の話では、性空上人は、式部の和歌に対し「袈裟」を贈っており、傍線部に「返しをばせで」とあるように、二人の間に贈答歌は成立していない。後者の話では、「御返事」とあるので、「袈裟」の他に、何らかの文が添えてあつ

たことも想定されるが、ここでも上人の返歌は具体的に述べられることはない。

しかしながら、慶安五年（一六五二）刊『訳和歌集』や、承応二年（一六五三）刊『法花訳和集』には、和泉式部歌と並んで、性空上人の歌が掲載されている。

吉田幸一氏は『和泉式部研究 二』^{注5}の中で、静嘉堂文庫蔵『法花訳和集』（江戸末期写本）を例に挙げ、「本書は内閣文庫蔵『訳和歌集』と同書。…○和泉歌『くらきより』の返歌たる性空上人の『かくはかり』一首は、本書に初出の歌であり、上人作の確証はない。」と述べられているが、『訳和集』は、現在二つの系統に分けられることが指摘されており^{注6}、内閣文庫蔵本（江戸初期写本）は第一系統、静嘉堂文庫蔵本は、承応二年刊本と同じ第二系統のテキストに分かれる。そして、次に挙げる性空上人の歌は、第一系統の『訳和集』には無く^{注7}、慶安五年刊本と承応二年刊本、それから承応二年刊本の写しと思われる静嘉堂文庫蔵本の『訳和集』にのみ存する歌なのである。したがって、上人の返歌が、もし『訳和集』初出であるとすれば、厳密に言うると、慶安五年刊本が最も古い例ということになる。

ここで、その歌を紹介しよう。これらは、慶安五年刊本の通し番号でいうと、175番、176番歌にあたる。

性空上人のもとへよみてつかはしける

雅致王女式部

175 くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山のはの月

返し

176 かく斗くらきにまよふ身なりともてらささらめや山のはの月

176 番には、詠者名はないが、175 番歌の詞書からみて、和泉式部の歌に応じたのは、性空上人と見てよい。この176 番「かく斗くらきにまよふ身なりとも…」歌は、やはり吉田氏が述べるように、『訳和集』初出の歌なのだろうか。和泉式部の「くらきより」歌と性空上人とのやりとりに関するエピソードを載せた文献資料を改めて検索してみたが、管見の限りでは、性空上人の「かく斗」歌を見出すことはできなかった^{注8}。そこで視点を変え、中世の直談物とよばれる法華経注釈書では、どのように語られているかを見てみることにした。しかし、その前に先ず、室町中期、遅くとも文安三年（一四四六）以前に成立したと見られる説話、『三国伝記』（玄棟 編）^{注9}、巻第八第二十「性空上人上東門女院相看事」を挙げておきたい。

…其ノ比ノ上東門ノ女院。自ニ花落ニ為ニ相看懺悔ノ密ニ登書写寺給ヒケリ。上人此事ヲ早ヤ知リ給フ。或夕暮ニ御弟子達被レ仰ケルハ。明日ノ午ノ時ニ八人ノ鬼是ヘ可レ来ル。寺中ノ人去ヘシト曰ケレハ。上人ノ御言ニ偽無シト思フ故ニ人々皆逃隠ニケリ。上人モ為ニ化導ノ鎮西ノ方ヘ下向有リト答ヘシトテ。持仏堂ニ入ラセ給ケル。御弟子ハ上人タニモ惶サセ給フ鬼。我等争テテカ面ヲ向ヘキト申セハ。我モ是ニ有ル上ハイタク怖畏アルヘキニ非スト仰アリ。サル程ニ女院ハ和泉式部以下八人ノ女房達皆ナ興ヨリ下テ御坊ニ入セ給ヒケリ。娉婷タル面容ハ如レ浮ニ芙蓉ノ暁ノ浪ニ。婀娜タル腰支ハ似タリ乱ニ楊柳夕嵐ニ。李夫人カ媚楊貴妃カ粧ヒ誠ニ妙ニ姿也。人々は見上人ノ鬼ト仰セラレツルハ是ニヤ。妖物ナルラントソ恐ケル。上人筑紫下向由ヲ答フ。女院此ヲ聞召ニ。伽耶山ノ月俄ニ傾キ。双樹林ノ花忽ニ萎メル御心地言ケルハ。我業障深重ノ故ニ。其罪ヲ悔テ適詣タル折節。御他行有ケル事ソ遠路モ進ントスルニ。有レトモ志無レ力。是ニ付モ女人ノ身程口惜

事ハナシトテ。泣々立帰ラントシ給処ニ。御供ナリケル和泉式部。

上人御覽在トヤ。暗ヨリ暗キ道ニソイリヌヘキ遙ニ照セ山ノ端ノ月ト。御坊ノ柱ニ書付テソ帰リケル。上人御覽シテ哀ニヤ思ヒ給ケン。遠ク延サセ給ケルヲ。呼ビ返シ奉ツリ御対面有ケルニ。真如薫修ノ眉ニ垂ニ寂光八字ノ霜ヲ。実相累徳ノ首ニハ載ニテ惣持三冬ノ雪ヲ。貴キ御在様也。女院ハ五障ノ女人何ニ修行シテ苦ヲ通レ侍ルヘキト。御ノ尋在ケレハ。上人云ク。法華経ヲ授給テ御経ノ箱ノ蓋ニ角ソ遊サレタル。

二ツ無ク三ツナキ法ト説ク故ニ五ノサハリアラシトソ思フ

女院ハ生々世々ニ難ク値ヒ。無数曠劫ニモ難キ聞。此経ヲ感得有テ泣キ帰給ケリ。…

『三国伝記』において、和泉式部は、上東門院のお供の一人として書写山へ参詣したことになる。初め、筑紫下向と称して、上東門院達に対面しなかつた性空上人が、御坊の柱に書き付けてあつた和泉式部の「くらきより」の歌を見て哀れに思い、一行を呼び戻して対面し、上東門院に法華経を授け、さらに経箱の蓋に「二つ無く三つなき法と説く故に…」の歌を贈っている。したがって、「二つ無く」歌は、上東門院の「五障ノ女人何ニ修行シテ苦ヲ通レ侍ルヘキ」という問いに応じたもので、和泉式部の「かくばかり」歌への直接の返歌ではない。ちなみに、この「二つ無く」歌は、『宝物集』においては、和泉式部の歌として知られる。『法華経』の「方便品第二」の中の「十方佛土中 唯一乘法 無二亦無三」と「提婆達多品第十二」の中の「又女人身 猶有五障」を踏まえたものである^{注10}。

二 直談系法華経注釈書

叡海作の『一乗拾玉抄』（明応二（一四九三）写）^{注11}には、

物語―一乗院ノ時、泉式部トテ遊女アリ書写ノ性空上人ヘ参リ上人ニ奉聴一可成仏ニ云テ参ルニ上人無ニシ御対面ニ式部申様ハ上人御対面無キハ我等女人ナル故也トテ哥ヲ奉ケル也 冥キヨリ冥道ニソ入リヌヘキハルカカニ照セ山ノハノ月 上人難有ニト思召シテ御対面アリト其時式部尋申様ハ女人ノ凡身成仏ハ法花ニハ何ノ文テ候哉ト上人答テ云ク無二亦無三也云云 式部哥―無レクニ無レキ三ツ法リト聞ク時ハ五ツ障リアラジトソ思フ

とあり、ここでは、上東門院のお供ではなく、「遊女」和泉式部が、自ら書写の性空上人の許へ参り、対面しようとしたが断られ、「くらきより」の歌を奉つたところ、その歌才が認められて、対面が叶うという筋書きである。式部の問いに性空上人は、「無二亦無三也^{云云}」と答えるのみで、上人の歌はなく、「二つ無く」歌は、式部の詠んだ歌とされている。

次に尊舜作の『法華経鷲林拾葉鈔』（永正九年（一五一一）作）^{注12}は、

物語云一条ノ院ノ御宇和泉式部ト云内裏女房有之参書写山ノ性空上人ニ可レ奉レ拜由ヲ申ヌ上人無ニシ御対面ニ其時奉テ一首哥ノ嘆申哥云 闇キヨリ闇キ道ニソ入ヌヘキ遙ニ照セ山ノ端ノ月 上人御哥ヲ御覽有テサテハ法華経ノ從冥入於冥ノ心ヲ説也トテ感嘆有ニ御対面有ニ云時彼女房奉レ向云法華経ノ内證如何上人答云無二亦無三也云云哥云

二ツナク三ツナキ法ヲ聞時ハ五ツノ障リアラシトソ思フ

多少簡略化されているものの、話の筋は、先ほどの『一乗拾玉抄』

とほぼ同じである。ただし、『一乗拾玉抄』で「遊女」と称された式部は、『法華經鷲林拾葉鈔』では「内裏女房」と記されている。

そして、栄心作の『法華經直談抄』（天文一五年（一五四六）^{注13}）では、別の話も加わって、さらに詳しく語られる。

從冥入於冥ノ文ニ付 物語有リ昔シ高尾ノ辺ニ貧僧一人有リ或ル夜寒ノ余リニ云様、アラサムヤ播磨ノ書写ノ聖宮上人ハ何カニ播磨紙ヲ多ク御持テ有リシ是レヲナフスマニシテ念仏セント云ケリ夜明ケレハ早朝ニ法師一人紙ヲ持来リ此ノ貧僧与テ虚空ニウセヌ是即聖宮上人ハ六根淨ニ叶故ニ書写ニテ聞故也此由一条ノ院ノ御宇ニ上東門院后伝ヘ聞給テ頓御供ノコシ七丁ニテ參詣シ給也上人ハハヤ此事ヲ知給テ云様、今日鬼カ七人可来一ル若シ我ヲ尋ハ西国辺ヘ下由可云一トテ内ニカクレ給ヘリ其日ハ女房七人來タリ同宿思様、此事ヲ鬼カ七人可来一トテ仰ル歟思テ上人ノ仰有リツル様ニ返事シケリ無曲一トテ都ヘ御上リ可キ有一定時、泉式部御供ノ女房ニテ有リケルカ、哥ヲ読メラキヨリクキヤミニソ入ヌヘキハルカニテラセ山ノハノ月トヨメリ上人ハ折節持仏堂ニテハ文ヲ読誦給テ聞キ合テ不思議ヲ思召シ出合セ対面シテ法花一部ノ大綱アラク令説キ聞一カ被申一時、此經ハ十方仏土中無二亦無三ト説ク時、女人モ悪人モ草木国土悉皆成仏ト見説給ヘリ其時后此ノ旨ヲ聽聞哥ニツナク三ナキ法トキク時ハ五ノ障リアラシトソ思ク又泉式部草木モ可成仏ト説給ヲ聞テ本尊ノ觀世音ノ生木ノ桜ニテ御座ス事思ヒ合シテヨメリ草木モ仏ニナルト説ク法ヲマコトアラワス山桜カナク女人ノ鬼ト云事ハ大經ニ女人ハ地獄ノ使ト説ケリ

前半部は、貧僧の話。そして後半部は、前半部の話に興味を覚えた上東門院が、先に挙げた『三国伝記』と同様、女房達を引き連れて、性空上人の許へ参詣するが、上人は、「鬼」がやって来るといつて、

持仏堂に隠れてしまふ。仕方なくお供の和泉式部が「くらきより」歌を詠むと、折しも持仏堂で「從冥入於冥」の文を読誦していた上人は、奇妙な一致を不思議に思い、一行と対面し、女人も悪人も草木国土も悉く皆成仏することを説く。『三国伝記』においては、上人が「二つなく」の歌を詠んでいたが、ここでは上東門院が、「二つなく」の歌を詠み、和泉式部は、「草木も木も仏になると説く法のまことあらわす山桜かな」という歌を詠む。「草木も木も」の歌は、『一乗拾玉抄』や『法華經鷲林拾葉鈔』には見られなかった和歌であり、『法華直談抄』は、他の二つの注釈書とは趣を異にする内容となっている。

最後に、『訳和集』の編者である実海（一四四六生〜一五三三没）が著した『轍塵抄』（大永六年（一五二六）^{注14}）は、廣田哲通氏によつて指摘されているように^{注15}、各品の冒頭歌が『訳和集』にほとんど重なるもので、前出の中世直談物の法華經注釈書系における和歌とは、様相が異なるといわれているものなのであるが、

性空上人読遣シケル 雅致女式部

闇ヨリ闇道ニツ入ヌヘキハルカニテラセ山ノ端ノ月
というように、和泉式部の歌のみで、上人の返歌は見られない。

以上、直談系の法華經注釈書に現れる、和泉式部の「くらきより」歌に関する話を辿ってみたが、結局、慶安五年刊本『訳和集』を遡る文献に、「かく斗くらきにまよふ身なりとも」という性空上人の返歌を見出すことはできなかった。

三 『訳和集』以後

しかしながら、『訳和集』刊行以後、寛文十三年（一六七三）刊の

『科註絵入法華経かな新註抄』（嘯月子著・内題は、「科註妙法蓮華経鈔」^{注16}）には、

性空上人のもとへよみてつかはしける

雅致女式部^{三ればねむめしきま}

拾遺哀傷　くらきよりくらきみちにぞ入ぬべきはるかにてらせ山

の端の月

返し

かくばかりくらきにまよふ身なりともてらさざらめや

山のはの月

とあり、又その他に、吉田幸一氏の『和泉式部研究 二』にも挙げられているように、近世における釈教歌注釈書として最大の『類題法文和歌集注解』（寛政二年（一七九〇）成立・畑中多忠編）に、^{注17}

従冥人於冥

拾遺

くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ

山のはの月

和泉式部

返し

かくはかりくらきにまよふ身也ともてらさざらめや

山のはの月

性空上人

と、取り上げられている。初めにも引用したが、吉田氏は、この「かくばかり」の歌について、「上人作の確証はない」と述べられている。確かに、現時点で、慶安五年を遡る文献に「かくばかり」歌が全く見られないということは、性空上人作の可能性はかなり低いであろう。歌のことばから見ても、「くらき」や「山のはの月」は和泉式部の歌からそのまま援用しているし、歌の解釈もいたって素直である。この

歌の詠作はさほど難しいものではなかったと思われる。しかし、『和集』以後の作品にも「かくばかり」の歌が取り上げられているということは、当時の人々が、この歌を性空上人の詠んだ歌として、認識していたと言えよう。

四 「かくばかり」以外の性空上人の返歌

さて、これまで述べてきた「かくばかり」の歌以外に、和泉式部の「くらきより」歌に対する別の返歌が、もう一首存在する。先に挙げた『科註絵入法華経かな新註抄』より少し遡って、寛文元年（一六六一）刊の仮名草子『本朝女鑑』（浅井了意？）^{注18}には、やはり上東門院に随行して播磨の書写山に性空上人を訪ねるも、対面を断られて泣く泣く下向する時、和泉式部が、御堂の柱に歌を詠んで書き付ける話がある。

くらきよりくらきみちにぞいりにける

はるかにてらせ山のはの月

上人たちいでみくり給ふが。このうたをみて。かきりなくかん

じつゝ。よびかへしたてまつりて

日はいりて月まだいでぬたそかれに

かゝげててらすのりのもしび

と。よみたまひて。さまかくほうもんどもときて。御けうけありけるとなり。しやかを日にたとへ。みろくを月になぞらへ。二ぶつのちうげんに。人をみちびくところ。みのりのともしびにあらずは。まよひのやみはいかでかてらすべき。まことにありがたきうたにこそ。しきぶがうたは。しうゐわかしうにいれ

られたり。

また、他に同じ話が、寛文十年（一六七〇）刊『日本名女物語』（作者未詳）^{注19}にあり、さらに、享保十一年（一七二六）刊『西国三十三処観音霊場記』（厚誉撰）^{注20}、天保十二年（一八四二）刊『女訓姿見女前訓糝種』（手島堵庵編）^{注21}、弘化二年（一八四五）刊『観音霊場記図絵』（厚誉撰・辻本基定画）^{注22}にも、「日はいりて」の返歌が見える。ただし、この歌に関しても、吉田氏は、『日ハ入りテ』一首は、寛文元年板『本朝女鑑』以来、性空上人の作とされてゐる」と注記されており、これまた性空上人作の確証は得られないのである。

五 結び

以上、和泉式部の「くらきより」歌にまつわる性空上人とのやりとりを辿ってきた。和泉式部は初め、「くらきより」の歌を詠んで、書写の性空上人の許へ遣つたが、時代が下ると、式部単独で、或いは上東門院の従者として、実際に書写山に参詣する話へと変容する。そして「くらきより」の歌を契機に性空上人との対面が叶い、法華経の教えを授かることになる。

美女の誉れ高く、恋多き女性であつた和泉式部は、それ故に、「遊女」とか、仏道修行を妨げる「鬼」とか称せられているが、そのような罪業深き女性でも、歌徳によって、極楽往生し、「後の世」で救済されているということは、五つの障りがあるとされながらも、信仰に篤かった女性たちにとっては、誠に羨ましく、尊敬の対象でもあつたにちがいない。

そのような和泉式部の「くらきより」歌に、返歌が存在するという

のはどういうことを意味するのか。今現在、近世以前に用例の見あたらない、『訳和集』所収の、

かくばかりくらきにまよふ身なりとも

てらさざらめや山のはの月

と、『本朝女鑑』等に見える

日はいりて月はまだいでぬたそかれに

かゝげててらすのりのもしび

の二首は、性空上人の作ではなく、おそらくは後の人が詠作し、補つたものである。しかしそれをあえて性空上人作として和泉式部との贈答歌としたのは、女人往生・女人救済というテーマをより現実的、かつ鮮明に浮かび上がらせるためではなかつたか。識者の御示教を仰ぎたい。

注

- 1 引用は、『新編国歌大観 第一巻 勅撰集編』（角川書店・昭和五八年）に拠る。
- 2 吉田幸一『和泉式部全集 本文篇』七二八頁『和泉式部』（奈良絵本・室町末期古写本）では、「くらきよりくらきみちにそ入にけるはるかにてらせやまのはの月」、七三六頁『いつみしきふ』（お伽草子板本）では、「くらきよりくらきやみぢにむまれきてさやかにてらせ山のはの月」となっている。
- 3 引用は、新編日本古典文学全集『無名草子』（小学館・一九九九年）に拠る。
- 4 引用は、新日本古典文学大系『古本説話集』（岩波書店・一九九〇）に拠る。
- 5 引用は、吉田幸一『和泉式部研究 二』（古典文庫・昭和四二年）七四一頁四行〜七行。

6 詳細は『文献探究』第三九号四七頁下段〜四八頁を参照されたい。

- 7 近年紹介・翻刻された、室町後期写とみられる、日本大学総合学術センター所蔵『訳和歌集』（『語文』第百十一輯、百十二輯・日本大学国文学会・平成十三、十四年）にも性空の返歌はない。
- 8 資料を検索するにあたり、次のものを参看した。
- ・吉田幸一『和泉式部全集 本文篇』（古典文庫・昭和三四年）
 - ・吉田幸一『和泉式部研究 一、二』（古典文庫・昭和三九、昭和四二年）
 - ・境田勝雄 等編『増補改訂 日本説話文学索引』（清文堂出版・昭和四九年）
 - ・徳田和夫『お伽草子事典』（東京堂出版・二〇〇二年）
 - ・『日本古典文学大辞典』（岩波書店・一九八三年）
 - ・『國文學 解釈と教材の研究』第三五卷一、二号（學燈社・平成二年一〇月号）
 - ・『新編国歌大観』CD-ROM（角川書店）
 - ・和歌史研究会編『私家集大成』（明治書院・昭和四八年）
 - ・萩谷 朴『平安朝歌合大成』（昭和三二年）
 - ・佐佐木信綱『日本歌学大系』（風間書房・昭和三二年）
 - ・久曾神 昇『日本歌学大系 別巻』（風間書房・昭和三四年）
 - ・太田為三郎編『日本随筆索引「増訂版」』（岩波書店・昭和三二年）
 - ・同 『続日本随筆索引』（岩波書店・昭和三八年）
- 9 引用は、『大日本佛教全書 第九十二卷 纂集部一』（講談社・昭和四七年）三〇七頁。
- 10 引用は、坂本幸男・岩本裕訳注『法華経 上・中』（岩波文庫・一九六二年）に拠る。
- 11 引用は、『一乗拾玉抄 影印 叡山文庫天海藏』（臨川書店・一九九八年）に拠る。
- 12 引用は、『法華經鷲林拾葉鈔 二』（永井義憲解題（臨川書店・平成一三年）の慶安三年（一六五〇）刊本に拠る。
- 13 引用は、『法華経直談抄 古写本集成』（臨川書店・一九八九年）の内、叡山文庫金台院蔵本に拠る。
- 14 引用は、叡山文庫天海藏『轍塵抄』（請求番号：天4/12/79）に拠る。
- 15 廣田哲道『中世仏教説話の研究』（勉誠社・昭和六二年）
- 同 『中世法華経注釈書の研究』（笠間書院・一九九三年）
- 16 引用は、九州大学文学部 松濤文庫蔵本（請求番号A3/11/1〜30）に拠る。この注釈書の概略については、『文献探究』第39号四七頁で述べた。猶、高木豊氏は、『嘯月』科註妙法蓮華経鈔「引載和歌考」（『日蓮とその教団』・吉川弘文館・平成一一年）の中で、この注釈書に『法華訳和集』が引載されていることを指摘されたが、「嘯月が稿本または写本『法華訳和集』を閲覧引載したか、刊本『法華訳和集』を閲覧引載したかは、現時点では確認出来ない」（三四四頁）と述べられていた。確かに種々問題点は残されているが、性空上人の返歌が見られることから、刊本『法華訳和集』を閲覧引載した可能性が高い。
- 17 引用は、塚田晃信編『類題法文和歌集注解 一』三二二頁（古典文庫・昭和六〇年）に拠る。
- 18 引用は、吉田幸一『和泉式部研究 二』（古典文庫・昭和四二年）五三八頁に拠る。
- 19 同 五四一頁
- 20 同 一二七頁
- 21 同 八二頁
- 22 同 一三六頁
- 付記 本稿をなすに当たり、貴重な典籍の閲覧許可を賜りました叡山文庫に深く感謝申し上げます。

翻刻

翻刻は、通し番号161番から260番歌まで。凡例は、『文献探究』第39号の49頁下段を参照されたい。

今回の翻刻範囲においては、内閣文庫蔵本の歌の並びにかなりの異同が見られた。そこで予め、その歌順を、慶安五年刊本の通し番号で示しておくことにする。

187 ↓ 186 ・ ・ ・ ↓ 226 ↓ 240 ↓ 238 ↓ 248 ↓ ◎ ↓ 247 ↓ 231 ↓ 245 ↓ 250 ↓ 233 ↓ 234 ↓
232 ↓ 241 ↓ 237 ↓ 243 ↓ 236 ↓ 242 ↓ 249 ↓ ◎ ↓ 253 ↓ 252 ↓ ◎ ↓ 258 ↓ ◎ ↓ 254 ↓
251 ↓ 256 ↓ 257 ↓ 255 ↓ 260 ↓ ◎ ↓ 259

※176・227・228・229・230・235・239・246番歌は、内閣文庫蔵本には無し。

略号◎…内閣文庫蔵本に有り、慶安刊本に無い歌。

アマネクミナヒヤクトウ也
普皆平等の心をよめりける (二・一四・ウ・四行目)

前大僧正慈鎮

161 けふの空にあまねくそくく雨の色はみな人ことの心にそそむ

【校異】 (一四・ウ) ④の心をよめりける―ナシ「内」、⑤そむ―しむ「内」
現世安穩ゲンゼアンウン 後生ゴシヤウセン 善処ゼンジョ のこころを

162 吹風も枝をならさぬ行末はちらぬ花をや宿になかめむ

風の枝をならさぬを現世安穩ゲンゼアンウンにとりゆくすゑに
ちらぬ花をみるを後生善処ゴシヤウセンジョとなるよし也

【校異】 (一四・ウ) ⑨現世安穩―現世の安穩「内」、⑩となるよし也―に

なすよしなり「内」
汝等ナンヂラカクヨキヤウハコレホサツノタウ也 所行是菩薩道ショコウジボツドウのこころを (一五・オ)

163 鹿の園になかめし花の色なから露もかはらぬ春の太山路

鹿シカの園そのとはほとけ成道じやうだうのはしめに阿含あこん

経きやうを説給せうひてもろくの声聞羅漢しやうもんらんとなれる

所かなり彼小乗せうじやうの修行しゆぎやうもいまわしの御山の

みのりとかはらすといふ心なり

【校異】 (二五・オ) ①のこころを―ナシ「内」、④なれる―なし給し「内」、

⑤所―処「内」、⑤御山―山「内」、⑥みのりと―御法とは「内」

授記品ジュキヒン

法性寺入道前関白太政大臣

164 種くちし仏のみにきらはれし人をもすてぬ法とこそきけ

むかしもろくの羅漢わかんたゝわが生死をいてん (一五・ウ)

事をのみ思ひて衆生の利益りやくの心なかりしを

仏よりくきらひ給へりたとへはいりたる種たねの

ふたゝひおへぬことくにかれらは仏になるへからすと

なり四十余年よのあひた是をのみ浅あきましく

思ひしに仏になるへしと記剽きべつをさつけ給ふゆへ

に種くちし人をもすてすとはいふなり

【校異】 (二五・オ) ⑩集付ナシ―玉葉「内」、⑩種くちし―種くちて「内」、

(二五・ウ) ②衆生の―衆生「内」、⑥思ひしに―思ひしに皆法花

経にて未来に「内」、⑥記剽をさつけ給ふゆへに―仏の給へるを

聞侍りて心やすらかになれるを「内」

右京大夫秀能

み草のみしけき濁にみしかともさても月すむ江にこそ有けれ
羅漢の仏になりかたきを濁水に月のやとら
ぬにたとへてよめりされともいまにこらすして(一六・オ)
月すむとなり

【校異】

(二五・ウ) ⑧右京大夫秀能―季能「内」、⑨濁に―濁と「内」、
⑨有―ナシ「内」、⑩仏になりかたき―成仏しかたき「内」、(一
六・オ) ①たとへて―たとへ「内」、①いまにこらすして―今は
濁すみて「内」、②となり―よしと也「内」

後嵯峨院御製

ふけゆかは出へき月と聞からにかねて心の闇そはれぬる

いま霊山にして成仏の記にあつかりて未来無
数劫をへて後八相成道せむ事をふけて月
のいつるといへりかねてそのよしを聞待るにい
まより心の闇はれぬといふよしなり

【校異】

読人しらす

行末を聞うれしさにこしかたのうかりしよりもぬるゝ袖かな

ゆくすゑをきくとは未来に作仏すへしとの
記なりこしかたのうしとはよりく仏になるへか
らすときらはれし事をいへり袖ぬるゝとは随
喜の涙なり

【校異】

法印公超

(二六・ウ) ②なるへからす―成ましき「内」

結びをく世々の契もふか草の露のかことにぬるゝ袖かな

迦葉目連の声 聞たち塵點劫より師弟の
因縁を結び侍しかいまに朽すして来世に
作仏すへしとの給ふを承ていとゝ仏の
恩ふかき事を感じたるよし也

【校異】

(二六・ウ) ⑥迦葉目連―迦葉目連等「内」、⑥声―聞たち―声聞
過去「内」、⑧作仏すへしとの給ふを承ていとゝ仏の恩ふかき事を
―作仏恩ふかきを「内」
於―未来世―咸得―成仏―のこゝろを

俊成

いか斗嬉しかりけむさらてたに浮世の事のしらまほしきに

これも未来作仏の事なるへし
ん世のことは「内」、③事なるへし―こと也「内」

行末はつるに仏のくらひ山かひある名をやけふは聞らん

来世に教主となり侍らん国の名ならひに仏
の御名までも一々に聞ゆへに位と名とはいへり

【校異】

前大僧正慈鎮

事をそふる物こそなれさせてももしあるはさなから法の里人

迦葉尊者仏となりて出給はむ国をは光徳国 (二七・ウ)

といはむ仏の御名をは光明如来と名つくへしとなりされはその国には魔障あるへからすとみえたりあるも又仏法をまほらんと願をたて侍れはあるはさなから法の里人といへるなり

【校異】 (二七・オ) ⑧無_レ有_二魔事_一 無_レ在_有魔事「内」、⑧の心をよめり

―ナシ「内」、⑩事をそふる―事をさふる「内」、⑩あるは―あらは「内」、(二七・ウ) ①迦葉尊者―迦葉尊者の「内」、③されは

―さて「内」、⑤いへるなり―いへり「内」
心尚懷_二憂懼_一のころを

すゝみゆく法の衣のいかならんうらやましきにぬるゝ袖哉

目連の記_キ勃をこひ奉る詞_{ことば}なりかゝる法花經の会座につらなりてまれなる法をきくと

いへとも作_さ伝_ふすへしときかぬあひたはなをうれ(二八・オ)ひをそふるころありと也

【校異】 (二七・ウ) ⑦のころを―ナシ「内」、⑧すゝみゆく―すゝき行

「内」さとりゆく「承」、⑧法の衣のいかならん―法の衣やいかな

らん「内」人はふたりなりにけれ「承」、⑨目連―自_目連「内」、

⑩こひ奉る―こふ「内」、(二八・オ) ①うれひ―うれへ「内」、②をそふる―をそるゝ「内」

化城喻品

觀_二彼久遠_一猶_レ如今_レ日_レの心を説_レ侍_レりける

前大僧正慈鎮

する墨のいふはかりなきいにしへもけふかきつくる心ちこそすれ

過去に好_レ成_レ国といふ国に大通智勝_レ仏と申
仏いて給ひきいまの釈迦_レの御世より是をはか
らは三千大千世界_レの大地を墨として東方

(二八・ウ)

より千の国を過て彼墨をつくさむされは
その墨つけたる国又あひたにつけぬ国をみな
抹_レして微塵_レとなして一微塵を一劫_レとし侍

らんよりなを過たらんとなりされとも如来
の仏眼をもつてみそなはずに彼時をも今日

のことしといへり教主_レ釈尊_レ西方の弥陀_レ東方の
薬師_レと申も彼御ほとけの因位_レにての子

にてわたらせ給へり迦葉_レ舍利弗_レ等のもる

く_レの声聞_レたちをはかの昔より教化_レしそめ
しといはむかためにかくのことくとたへ給へり

【校異】 (二八・オ) ⑤彼_カ後_後「内」、⑤の心を説_レ侍_レりける―ナシ「内」、

⑧といふ―といひし「内」、⑨いまの―今「内」、⑨御世―御代「内」、
(二八・ウ) ①過て彼墨_{ナミ}をつくさむされはその墨つけたる国―過

ては點をうち又過てはうちして彼墨をつくして其墨つけたる「内」、
②つけぬ国―つけぬ国とも「内」、④となり―ナシ「内」、⑤彼時

をも―彼遠きも「内」、⑦薬師と申も―醫王と侍るも「内」、⑦子
―王子「内」、⑨教化_{ケウケ}しそめし―教_{ケウ}けし教_{ケウ}そめし「内」

從_レ冥_ニ入_ニ於_ニ冥_ニの文をよめり (二九・オ)

頼むへし闇よりやみにうつるとも影にかけそふ月も出なむ

諸仏出世のとき時は善趣は滅して悪道は
増長するかゆへに生るゝ衆生やみよりやみ

ちに入てまよふ事はなはたしとなり

【校異】 (一九・オ) ①の文をよめり―ナシ「内」、③諸仏―諸仏の「内」、

④悪道―西道「内」、④するかゆへに―する故に「内」、④やみよ

りやみちに入て―くらくらきよりくらくらき道に入て「内」

性空上人のもとへよみてつかはしける

雅致王女式部

175 くらきよりくらくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山のはの月

【校異】 (一九・オ) ⑦王女―女「内」

返し

176 かく斗くらくらきにまよふ身なりともてらささらめや山のはの月

【校異】 (一九・オ) ⑧⑨(176番歌)―ナシ「内」

入道二品親王尊円 (一九・ウ)

177 五月やみ木のした闇はくらくらきよりくらくらきにまよふ程そくるしき

【校異】 (一九・ウ) ②闇―道「内」「承」、②程―道「承」、(左注ナシ)

―同前「内」

以二大慈悲力二度ニ苦惱衆生二の文をよみ侍り

ける 俊成

178 世中にくるしき道はあはれみのちから車のはこふなりけり

ほとけの慈悲を車にたとへたり

【校異】 (一九・ウ) ③の文をよみ侍りける―ナシ「内」、⑤世中に―世中

の「承」、⑥慈悲を―慈悲心をもつて「内」、⑥たり―侍り「内」

願 以二此功德二普 及二於一切二我等与二衆生二皆共

成二仏道のこゝろを説給ひける
前大僧正慈鎮

179 おこなひのはてにとなるることわさをうけゝる袖や天のはこ

も

彼文は大通仏のみもとへ梵天王まいる給ひて色 (二〇・オ)

くの花をさゝけ種々の宮殿を奉りて供養

のをへて後廻向し侍し文なりされはいまも

これをとなふるなり如来のうけたまへるもあま

ねかるへしといふ心を天の羽衣といふなり

【校異】 (一九・ウ) ⑦及二―及二「承」、⑦のこゝろを説給ひける―ナ

シ「内」、⑩ことわき―ことくさ「内」「承」、⑩うけゝる―うへゝ

る「承」、(二〇・オ) ①彼文は―彼偈の文は「内」、①大通仏の

みもとへ―大通のみなもとへ「内」、①梵天王―梵天王の「内」、

②種々―数々「内」、④これをとなふるなり―是をよろつのおこな

ひの終にはとなふる也「内」、④あまねかるへし―あまねく有へし

「内」、⑤といふなり―となり「内」

化城宝所の譬の心を説侍りける

康資王母

180 みちとをみ半天にてや帰らまし思へはかりの宿そうれしき

【校異】 (二〇・オ) ⑧半天―中空「内」

源光俊

181 ゆくへしといひてそつみに帰らましひなの長路に宿なかりせば

【校異】 (二〇・オ) ⑨源光俊―光俊朝臣「内」、⑩ゆくへし―行えし「内」、

⑩長路に―今路の「内」

赤染衛門

(二〇・ウ)

哉

182 こしらへてかりのやとりにやすめすはまことの道にいかていら
まし

【校異】 (二〇・ウ) ②道にいかていらまし―道をいかてしらまし「承」

大僧正慈鎮

183 のりの道にけふかり初の草枕結ひし末の宿そうれしき

【校異】 (二〇・ウ) ④集付ナシ―後拾「内」、④かり初の一かり初に「承」

184 思ふなようき世中を出はてゝやとる奥にも宿は有とは

【校異】 (二〇・ウ) ⑤宿は―宿そ「内」、⑤有とは―有けり「承」

西行法師

185 やすむへき宿と思へは半天の旅もなにかはくるしかるへき

【校異】 (二〇・ウ) ⑦宿と―宿をは「承」、⑦思へは―思へ「承」、⑦半
天―中空「承」

源三位頼政

186 かりのやにしはしやすむるしるへあれはつみにまことの道にき
にけり

【校異】 ナシ

円世法師

187 かり初の宿ともしらて尋こしまよひし道そしるへなりける

【校異】 (二一・オ) ①集付ナシ―新後撰「内」、①まよひし―迷ひの「内」

まよひそ「承」、①道そ―道の「承」

定家

188 かりのやにたとふる法をあふけともしはしやすめぬ身のうれへ

彼たとへの心はたとへは人あつてたからの山に
いたらんとせんにひとり先達智恵才覚
あるをしるへとしてゆくにその道とをき事五
百由旬なりしかるにかのいたれるものとも三百
由旬をこえ侍りのこり二百由旬を過かたく
てつかれはてぬそれよりさきへはなか／＼に
すゝむへからすと申時に先達中途にか
りの都をしつらひ侍りてはやこゝこそ宝の
都そといふにみな悦あへりさてよく／＼やす
めをきて後かの先達申けるやう是はあま
りにつかれ給へは方便して城とはいひつれ
ともしからすいま二百由旬を尽してまこと
の宝の山に入とていさなひ侍りて思ひのまゝ
にいたらしむと也かの先達と申は釈迦ほとけ
也もろ／＼の人は声聞たち也三百由旬の險
難とは三界のうちの煩惱有漏の境なり
かりの都とは根機の及にしたかひて小乗の
法を説て羅漢の位にのほらしめ給ふとなり
こゝもとにしはしやすめて其後三界の外
無明のまよひをつくして真実大乘の道に
かなひさとりをひらかしめ給ひし事なり

(二一・ウ)

(三三・オ)

【校異】 (二一・オ) ②定家―前中納言定家「内」、③かりのや―かりの宿
「承」、④あつて―有て「内」、⑤いたらん―いらん「内」、⑤先達

をしへ置露のかことを便にてひとつ草葉にやとる月影

【校異】 (二二・オ) ⑥三卷一三卷「内」、⑦心を夏に一心をよみて夏に「内」、⑦読侍りける一ナシ「内」、⑧定家一前中納言定家「内」、⑨なきつる一たつめる「承」、⑨まとはまし一まよまし「内」、⑩かりの都一化城「内」、(二二・ウ) ①郭公と一時鳥を「内」
 在、諸仏土常与レ師俱 生といふ心を
 蓮生法師

定家

(二三・ウ)

郭公なきつる嶺もまとはましかりねやすむるしるへならずは

是もかりねやすむると侍るはかりの都の事也

夏によするゆへに郭公といへるか

(二三・ウ)

定家

母の周忌に法花経をみつから書て卷々
 の心を読んで表紙の絵にかゝせけるに三
 卷の心を夏によせて読侍りける

山の端の月にそのりししはこの野へ行鹿にかくる小車

【校異】 (二三・オ) ⑦受記一ナシ「内」、⑧といふ文をよめる一といふ心を「内」、⑩この一こそ「内」、⑩かくる一かへる「内」

定家

(二三・ウ)

ひと度縁を結ひて後は影の形にしたかふ
 かことく衆生と仏とはなるゝ事なしと也

【校異】 (二二・ウ) ②生といふ心を一王といふことを「内」、⑤したかふ一そふ「内」、⑥事一時「内」
 以是本因縁一今説法花経の心を
 前大僧正慈鎮

みぬむかしはるかに結ふ岩代の松の契もいまやとくらん

岩しろの結ひ松といふ事の侍るを昔縁を

結ひしにとりあはせ侍る也たゝし岩代の松は (二三・オ)

むすひて後とき侍らさりしかされは今の声聞

たちは法花をとくにあへるゆへに契もいまや

とくらんといふかもの字らむの字に心をかけ

給ふなり

【校異】 (二二・ウ) ⑦の心を一ナシ「内」、(二三・オ) ②されは一さて

「内」、③法花をとくに一重々法を説に「内」、④らむ一らん「内」、

④かけ給ふなり一かけて見給ふへし「内」

第四卷五百弟子受記品

内秘一菩薩行一外現一是声聞一といふ文をよめる

前大僧正慈鎮

193

いにしへの鹿なく園の庵にもころの月はくもらさりけり

【校異】 (二三・ウ) ①定家―ナシ「内」同「承」、①園―園「内」、(左注

ナシ)―おなし「内」

右近中将良経

194

ひとりのみくるしき海を渡るとや底をさとらぬ人は見るらん

【校異】 (二三・ウ) ③右近―左近「内」

前大僧正道宝

195

したにすむもとの心をしらぬ哉野中の清水み草あぬれは

【校異】 (二三・ウ) ⑥集付ナシ―新後撰「内」、(左注ナシ)―経文の心

あらはなり吟味し給ふへし「内」

五百品のころを

定家

196

恋しとてこかるゝ色もあらし吹はゝその原に人もやとらて

富楼那尊者法明如来となつて来世に善

浄国と申国にて成道すへし其国には女人

(二四・オ)

あるへからす一切の人みな化生せむといへり

しかも定家卿の母のために経供養せしと

きの哥なれば誠にいひあはせ侍るか

【校異】 (二三・ウ) ⑦五百品のころを―五百弟子品心を「内」、⑧定家

―前中納言定家「内」、⑨色も―色を「内」、⑨その原―そか原「承」、

⑩なつて―名乗て「内」、(二四・オ) ①成道―成仏「内」、②

いへりしかも―いへる有其原に人のやとらぬとは是也「内」、④

なれば―也「内」、④いひあはせ侍るか―似合侍る歟「内」

其不_レ在_二此会_一 汝当_二為_三宣説_一のころを

前大僧正慈鎮

197

法の花ちるともうせぬ物なればけふみぬ人に猶もつたへよ

此品にて惣記とてもろくの声聞みな授記し

給へりもしたゝいまこゝもとに座せぬ羅漢

あらは迦葉尊者かくのことくいひつたへよとのた

まふなり

(二四・ウ)

【校異】 (二四・オ) ⑤のころを―ナシ「内」、⑦花―花は「内」、⑦ち

るとも―ちれとも「承」、⑦けふみぬ―けふのぬ「内」、⑧みな授

記し給へり―皆仏に成へしおなしく名をは普明如来といはむとお

しへて授記し給へり「内」、⑩いひつたえよとのたまふなり―宣た

まふへしと也「内」

五百品のころを誦侍りける

僧都源信

198

玉かけし衣のうらをかへしてそをろかなりける心をはしる

【校異】 (二四・ウ) ②五百品―五百弟子品「内」、②誦侍りける―ナシ「内」、

④集付ナシ―新古「内」

定家

199

袖のうへの珠を涙と思ひしはかけけむ君にあはぬなりけり

【校異】 (二四・ウ) ⑤定家―ナシ「内」少僧都源信「承」、⑥集付ナシ―

新勅撰「内」

法性寺入道前関白太政大臣

200

きてつくる人なかりせは衣手にかゝる玉をもしらすやあらまし

【校異】 (二四・ウ) ⑦法性寺―法成寺「内」「承」、⑦関白―撰政「内」、

⑧集付ナシ―同「内」、⑧かゝる―かくる「内」

僧正静円

201 吹かへすわしの山風なかりせはころものうらの玉を見ましや

【校異】 (二四・ウ) ⑩集付ナシ―金葉「内」

祐成法師

(二五・オ)

202 立かへりとはすはいかゝからころもうらにかけたる玉もしらまし

【校異】 (二五・オ) ①祐成―祐感「内」承、②集付ナシ―続拾「内」

赤染衛門

203 酔のうちにかけし衣の珠そとも昔の友にあひてこそきけ

【校異】 (二五・オ) ④集付ナシ―玉葉「内」、④かけし―つけし「内」

俊成

204 うらなりし玉とも兼てしらさりき酔さめてこそ嬉しかりけれ

【校異】 (二五・オ) ⑤俊成―ナシ「内」、⑥集付ナシ―後拾遺「内」、⑥

うらなりし―衣なる「内」、⑥兼て―かけて「内」

前大僧正快雅

205 嬉しさを袖につゝみし玉そともけふこそ聞て身にあまりぬれ

【校異】 (二五・オ) ⑦前大僧正快雅―前権僧正快雅「承」、⑧集付ナシ―

続古「内」、⑧嬉しさを―嬉しさは「内」承

平恒正

206 衣手にありとしりぬる嬉しさに涙の玉も数そそひける

【校異】 (二五・オ) ⑨恒正―雅正朝臣「内」、⑩集付ナシ―玉葉「内」、

⑩玉も数そそひける―玉をかけそゝへつる「内」玉をかけそそえ

つる「承」

性敵法師

(二五・ウ)

207 いつかけし衣のうらの玉とたにしらてうき世に迷ひきぬらん

【校異】 (二五・ウ) ②集付ナシ―新拾「内」、②うき世―幾世「内」

読人不知

208 をろかなる涙をかけて歎かな衣のうらの玉をしらねは

【校異】 (二五・ウ) ④集付ナシ―同「内」

寂蓮法師

209 涙をや衣の玉と結びけんありときくよりぬるゝ袖かな

【校異】 (二五・ウ) ⑥集付ナシ―続古

九条左大臣

210 をろかなる心からこそ我袖にかけゝる玉を涙とはみし

【校異】 (二五・ウ) ⑦九条左大臣―九条左大臣女「内」承、⑧集付ナ

シ―続千「内」、⑧みし―みれ「内」承

大僧正行尊

211 衣手につゝみし玉のあらはれてうらなく人にみゆるけふかな

【校異】 (二五・ウ) ⑨大僧正行尊―前大僧正行尊「内」、⑩集付ナシ―新

後撰「内」

頓阿

(二六・オ)

212 よしさらはかけし衣も朽はてねうらなる玉のあらはるゝまで

【校異】 (二六・オ) ①頓阿―頓阿法師「内」

法印成運

213 波かくる衣のうらをきてみればもにあらはれて玉そよりくる

【校異】 (二六・オ) ④集付ナシ―新千載「内」

法印乘雅

214 などか我衣のうらのたまさかに法にあひてもさとらさり劔

【校異】 (二六・オ) ⑥集付ナシ―新後撰「内」

西行法師

215 をのつからきよき心にみかゝれて玉ときかくる法をしりぬる

【校異】 (二六・オ) ⑧しりぬる―しるかな「承」

法印憲実

216 まよひこし玉の行ゑもあらはれぬ身を空蟬のうすき袂に

【校異】 ナシ

前大僧正慈鎮

(二六・ウ)

217 袖のうへの露のまよひをうちかへし玉を衣のうらにみる哉

衣の玉の辟と申侍るは人あつて親友の家に

至て酒に酔ふしぬ親友時におほやけ事あ

りてよそへゆくへしとてあたひ限らぬ玉を

かれかきたる衣のうらにかけてさりぬその人

は惣て是をしらすして他国にゆきて衣食

のためにさまゝの艱難にあへりすこしも

得る事侍れば足ぬとせり然して後親友

にふた度あへりその時親友の給ひけるは我む

かし汝をやすからしめんかために衣に玉をかけた(二七・オ)

りきその玉はいまにありをろかにしてしらすと

いふそのことく昔ほとけ羅漢たちを教化し

て一切智願の心をえせしめむとし給ふにその

心わすれはてゝしらすわつかに羅漢の道えて

真実の道とおもへり昔の一切智の願いまにう

せはてすして身にありといへり親友といへるは

積尊なり人は声聞たちなり衣とはかれらから心に

信樂し慚愧するを二の衣とせり玉とは一切の

智いまの法花経これなりかゝるたからを身に

かけながら賤もまつしくをくりよそに衣食をも(二七・ウ)

とめけるよとさとり侍るよしなり

【校異】 (二六・ウ) ②玉を衣のうらに―衣のうらのたまを「承」、③あつ

て―ありて「内」、④酔ふしぬ―酔て臥ぬ「内」、④ありて―侍り

て「内」、⑤とて―として「内」、⑧すこしも―若すこしも「内」、

(二七・オ) ②その玉―其玉は「内」、②あり―有て「内」、②を

ろかにしてしらす―おろかなり「内」、③羅漢たち―諸の羅漢たち

「内」、④願―ナシ「内」、④えせしめむとし給ふにその心―おこ

さしめ給ひたるに其心を「内」、⑥一切智の願―一切智願「内」、

⑧積尊―釈迦世尊「内」、⑧人は―醉人は「内」、⑧声聞―らか

ん「内」、⑨信樂し―信樂「内」、⑨するを―する心を「内」、⑨

一切の―一切「内」、⑩法花経―法花「内」、(二七・ウ) ②よしな

り―よし也此辟の心を見給ひて哥共を吟味し給へし「内」

人のもとに経供養しけるに弟子品の心をと

けるに無価の宝珠のたとへを聞てたうと

かりけるよしの哥よみてかつけものに結びつ

け侍るをみて返しによみ侍りける

權僧正永縁

218

いかにして衣の玉をしりぬらむ思ひもかけぬ人もある世に

【校異】 ナシ

念珠をもとめうしなひて朝にけさにま
つはれてありけるをみて

慈恵大僧正

(二八・オ)

夢さめて衣のうらを今朝みれば玉かけなから迷ひけるかな

【校異】 (二八・オ) ②けるかな―ぬるかな「内」

天台座主公豪

あつめをく窓の螢よいまよりは衣の玉の光ともなれ

螢を窓にあつむとはかのひかりに映して書を

よむ古事つねの事なり又螢を玉のひかり

ににせ侍る事あればかくよめり

【校異】 (二八・オ) ③公―ナシ「内」、④集付ナシ―続拾遺「内」、⑤あ

つむ―あつむる「内」、⑦かく―よく「内」、⑦よめり―よみ侍るな

り「内」

住房の西谷に岩ほあり定岩と名つく松

あり繩床樹といふもとは二枝にて座する

に便あり正月雪ふる日すこしひまある程

座禪するに松風はけしく吹て墨染の袖に霰 (二八・ウ)

ふり積て侍りけるをつゝみて石のうへをたつとて衣

裏の明珠のたとへを思ひ出てよみ侍りける

高弁上人

221 松の枝岩ほの苔に墨染の袖の霰やかけししら玉

【校異】 (二八・オ) ⑧西谷―西の谷「内」、西谷「承」、⑧定岩―定心石

「承」、⑨にて―にして「内」、①松風―松の風「内」、(二八・ウ)

①霰ふり積て―雪ふりて「内」、③裏の―裏「内」、⑤集付

ナシ―新勅「内」、⑤枝―枝の「内」
世尊於長夜常 愍 見教化のころを

俊成

222 なかき夜に猶さてのみやすくさまし哀とみつゝをしへさりせは

【校異】 (二八・ウ) ⑥のころを―ナシ「内」、⑦俊成―皇太后宮大夫俊

成「内」

訳和歌集三

人記品

前中納言定家

(訳和三・一・オ)

223

諸共に思ひそめける紫のゆかりの色もけふそしらるゝ

羅睺羅尊者ほとけのいままた太子にてわたら

せ給ひし時の御子なり俗の中にもつとも

おもし阿難尊者は又御いとこにしてしかも又

侍者なれば出家の中にはなはたすくれ侍りし

かるに彼二人いまて成仏の記にもれ給へは大

衆も疑をなし又二人の願もみち侍らすされ

とも此品のとき阿難をは山海恵自在通王 (二・ウ)

仏となるへしとの給ひ羅睺羅をは踏七宝花

仏とならんと仰られし時われも人もねかひみ

ち疑とけにけるをかくいへり

【校異】 (二・オ) ①訳和歌集三―ナシ「内」、法花訳和集三「承」、④色

も―いろと「内」、⑤羅睺羅尊者―羅睺羅尊者は「内」、⑦にして

―にて「内」、⑦しかも又―しかも「内」、⑨いまて―いまた「内」、

⑩みち侍らす―満す「内」、(二・ウ) ①通王仏―道王仏「内」、

②との給ひ羅睺らごをば―羅睺らごをば「内」、③仰られし―の給ふ「内」
よみをき侍りける 釈教しやくけうの哥かを熊野くまのへ奉
りける中に人記品のこゝろを

法眼源承

我ねかひ人ののそみもみつしほにひかれてうかふ浪のした草
さきのことくに大衆も二人の授記じゆぎにもれぬること
をうたかひをのくも不足ふそくにみ侍るところに
授記じゆぎをき奉りて我願がくわん既満しゆまう衆望しゆぼう亦足よくとくの
こゝろをかくいへり

(二・オ)

【校異】 (一・ウ) ⑥人記品のこゝろを―人記品を「内」、⑨ことくに―

とく「内」、⑨授記―記「内」、⑨もれぬること―漏ぬこと「内」、

⑩み侍る―思ひ「内」、(二・オ) ①既し―既き「承」、①のこゝろを―

といへる心を「内」

我願わがくわん既満しゆまん衆望しゆぼう亦足よくとくといふ文をよみ給ひける

前大僧正慈鎮

我ねかひみちて嬉しきまとひ哉誰ものそみのかなふ筈に

【校異】 (二・オ) ③我願わがくわん既満しゆまん衆望しゆぼう亦足よくとくといふ文をよみ給

ひける―ナシ「内」、⑤まとひ―内居「内」、まとあ「承」

寿命じゆみん無な有あ量りやう以もつ 啓けい 衆生しゆじやう 故この心を

俊成

かきりなき命となるもなへて世のものゝ哀をしればなりけり

阿難尊者あなんそんしや仏ぶつとならせ給ひては山海せんかい恵ゑ自在じざい

通王つうわう仏ぶつと申へし彼仏かひぶつの寿命じゆみやうはかりなし

とみえたりいかなるゆへにかかくのことくあるとは(二・ウ)

ふに衆生おほくしてそれをあはれむゆへと
みえたり

【校異】 (二・オ) ⑥の心を―ナシ「内」、⑦俊成―皇太后宮大夫俊成「内」、

⑨阿難尊者―阿難尊者の「内」、⑨仏と―仏に「内」、⑩通つう―道「内」、

⑩寿命じゆみやう―寿命は「内」、(二・ウ) ①かくのことくあるとは―かく

あると云に「内」

令めい三さん我念わがねん過去こくわ無量むりやう諸仏しよぶつ法ぽう如に今日こんにち所聞しよもんと

いふ文を よみ人しらす

昔いま鏡をかけてしるのみか行末とても曇やはする

阿難護持あなんごぢ仏法の徳とて仏の説せつをひと度

聞てわするゝ事なし今日釈尊の法のみな

らす過去の仏々ことにまことは侍者じしやとなつて

佛法を護持ごぢし給ふ事をかくいへり過あやまりにしかた

をもつて行末の事をかゝみ侍るに未來みらいの (三・オ)

諸仏の法蔵をもかくこそ護持し給はめと也

【校異】 (二・ウ) ④ゝ(三・オ) ②(227番歌)―ナシ「内」

僧都源信

いにしへはをのかさまくありしかとおなし山にそけふは入ぬ

る

【校異】 (三・オ) ③ゝ④(228番歌)―ナシ「内」、④けふ―今日「承」

前大僧正慈鎮

さきの世もなにかへたてむおなしときみな仏にしならんとすれ

は この品のをはりに二千人の声聞来世に十方

の国にて名もおなしく宝相如来と名のり
おなし時成道すへしと授記し給へるをお
なし山に入とはたとへいふなり

【校異】 (三・オ) ⑤⑩ (229番歌) —ナシ「内」、⑥世も一ひと「承」

平久時

(三・ウ)

木のまより出てすむへき月影を待ときかする秋風の声

木のまをいつる月とは来世に作仏すへき二千

人なりすてに未来世なれば待としらするとい

へり

【校異】 (三・ウ) ①⑤ (230番歌) —ナシ「内」

法師品

伝教大師

231 此法をたゝひとこともとく人はとももの仏のつかひならずや

法花経の乃至一句をとく人もしるへしこの

人はすなはち如来の使なりとももの仏とはもろ

くのほとけの使なりといふ心なり

(四・オ)

【校異】 (三・ウ) ⑥法師品—ナシ「内」、⑧とももの—もとの「内」よもの

「承」、(左注ナシ) —「内」

又如来滅度之後若有レ人聞ニ妙法花経乃

至一偈一句ニ念ニ随喜者ニ我又与ニ授阿耨

多羅三藐三菩提記のこゝろを説侍り

ける 前大僧正実聴

232 いつはりのなきことの葉の末の露後の世かけて契をく哉

経文のこゝろ哥の中にあきらかなり

【校異】 (四・オ) ②妙法花経—妙法蓮花経「内」、③一念随喜者

我又与ニ授阿耨多羅三藐三菩提記のこゝろを説侍り—阿耨菩

薩の心を「内」、⑤前大僧正—権僧正「内」、⑤実聴—実聴「内」「承」、

⑥集付ナシ—玉葉「内」、⑦(左注)—ナシ「内」

日吉の社にて如法経十種供養し侍りけ

るに法師品の種々供養のこゝろを説ける

参議雅経

233 誰もけふひとくさならぬ花の香に露のかことや結び置らん

(四・ウ)

花を散し香をたき幡を、ほひ蓋をを

ほひなんとして此経を供養し奉るへしと也

【校異】 (四・オ) ⑧十種—ナシ「内」、⑧けるに—ける「内」、⑨説け

る—ナシ「内」、⑩参議雅経—同「内」、(四・ウ) ②③(左注)

—ナシ「内」

啓ニ衆生ニ故生ニ於悪世ニ広演ニ此経—といふ心を

俊成

234 これもこれうき世のためとむまれきてかくは御法をとくことこそ

きけ

法花経修行の人はやかて浄土に生すへけれ

とも悪世の衆生をあはれむ心によりて濁

世に生て人のために此経をとき侍るとなり

【校異】 (四・ウ) ④悪世—恵世「内」、④といふ心を—の心を「内」、⑤

俊成—俊成卿「内」、⑥これもこれ—これその「承」、⑦⑧⑨(左

注)—ナシ「内」

須由聞^{シユモキカ}之^レ 即得^チ 究^ク 竟^ニ 阿耨菩提^{アヌボツ}の心を

前大僧正公澄

(五・オ)

ひと声をきゝそめてこそ郭公なくに夜ふかき夢は覺けれ

須由とは時節のいとみしかき程なればひと声

きくによそへたり無上菩提を証する事は

さまゝの迷をつくしはつるをはりなれば夢さ

むるといへり

【校異】 (四・ウ) ⑩須由―須與「承」、(五・オ) ②須由―須與「承」、③

法花最 第一のころを讀ける

前大僧正慈鎮

春の花秋の野はらを詠捨て庭のはちすの花咲にけり

如來一代のあひた説給へる 諸経をすべて巳今

当の三説とせり花嚴経より般若経までの

四十余年の経はすでに説をはれるを巳説といひ

涅槃経いまたとかさるを当説といひ無量義

経は法花同座の説なれば今説とすその中に

いまの法花経すくれたれば最第一といふなり

【校異】 (五・オ) ⑦法花最 第一のころを讀ける―ナシ「内」、⑧

前大僧正―ナシ「内」、⑨春の花―春の山「内」、⑨捨て―すて「内」、

⑨花咲にけり―花をみる哉「承」、⑩(五・ウ) ⑤(左注)―ナ

シ「内」
漸見ニ 湿土泥 決定知レ近 水のころを

俊成

むさし野の堀かねの井もある物を嬉しく水のちかつきにけり

【校異】 (五・ウ) ⑦俊成―皇太后宮大夫俊成「内」、⑧集付ナシ―千載「内」

定家

尋ゆく清水にちかき道それ御法の花の露のした影

【校異】 (五・ウ) ナシ―法師品 同「内」

尋きてちかつく水にするき哉まつひらくへき胸の蓮は(六・オ)

【校異】 (六・オ) ①(239番歌)―ナシ「内」

母の周忌に法花経をみつから書て卷々

の心をよみて表紙の絵にかゝせけるに四

の巻のころを

身をしほる山井の清水をとちかしききたつ人に風や涼しき

是は穿鑿高原の辟といふ事侍りたとへは人

あつて渴して水をえんかために高き岡を

ほりうがつにはしめの程はかきたるつちのみい

てゝ水はなはたとをしと思ひていとゝはけま

してほるにすこしうるほへるつちをえたり

水ちかしとしりて猶やますもとむるによ

つてほるにすみたる水を得たりかはきうる

ほへる水は四十余年の説のこたくすめる水は

法花にたとふるなり

【校異】 (六・オ) ナシ―四卷 夏 定家卿「内」、②④(詞書)―ナ

シ「内」、⑥(六・ウ) ④(左注)―ナシ「内」
柔和忍辱衣のころをよみける

藤原伊信

241 我ためにうきを忍ふのすり衣みたれぬ色や心なるらん

【校異】 (六・ウ) ⑤のころをよみける―ナシ「内」、⑥伊信―伊信朝臣

「内」、⑦集付ナシ―続拾遺「内」

前大僧正慈鎮

242 墨染の袖をとほや法のしにそれまことの忍ふもち摺

ほとけ滅度し給ひて後の悪世に法花経を

ひろめんともからはみな柔和忍辱の衣を着

して違縁悪縁をも忍ふへしと也

(七・オ)

【校異】 (六・ウ) ⑧前大僧正慈鎮―ナシ「内」、⑨それそ―それも「内」、

⑩(七・オ) ②(左注)―ナシ「内」

加二 刀杖 瓦石 念レ 仏故 忍の心を

寂然法師

243 ふかき夜の窓うつ雨の音せぬはうき世を軒の忍ふなりけり

【校異】 (七・オ) ③忍―ナシ「内」、④寂然―寂連「内」【承】、⑤雨の―

雨に【承】

寂漠 無二人声 読誦 此經典 我尔時 為現ニ

清浄 光明身 二の心をよみ侍りける

俊成

とふ人の跡なき柴の庵にもさしくる月の光をそみる

【校異】 (七・オ) ⑦ 読誦 此經典 我尔時 為現ニ 清浄

光明身 一 清浄光明身 読誦 此經典 我尔時 為現「内」、⑦の心を

よみ侍りける―ナシ「内」、⑧俊成―俊成卿「内」、⑨集付ナシ―

新後撰「内」、⑨さしくる―さし入「内」、⑨みる―みつ【承】

僧都源信

245 しつかにて法とく人そたのもしきわれらみちひく使と思へは

(七・ウ)

【校異】 (七・オ) ⑩僧都源信―前権少僧都源信「内」

定家

246 静なるところはやすく成ぬへし心すまさむかたのなき哉

【校異】 (七・ウ) ②定家―権小僧都源信【承】、③成ぬ―有ぬ【承】、②

③(246番歌)―ナシ「内」

選子内親王

247 空すみて心のとききさよ中に有明の月の光をそさす

【校異】 (七・ウ) ⑤さす―ます【承】

後京極

248 心すむ草の庵の法の水うれしく月の影やさすらん

【校異】 (七・ウ) ⑥後京極―後京極撰政太政大臣【内】、⑦法の水―水に

又「内」、⑦うれしく―嬉しき【内】⑦さす―すむ【内】

前大僧正慈鎮

草のいほに声も心もすみぬへし人は影せぬ光をそみる

しつかなる所の人も影せぬ山林樹下にてひとり

此経をよみ侍らむとき 積尊かれかために (八・オ)

光明を現してその身を照すへしと也

【校異】 (七・ウ) ⑧前大僧正慈鎮―ナシ「内」、⑨へし―らし【承】、⑨

⑨(八・オ) ②(左注)―ナシ「内」

参議雅経

250 闇晴ぬ人の心をさそふとてうき世をめくる山のはの月

凡夫のまよひをつくし侍らぬために仏の光

を放はなててらすとなり

【校異】 (八・オ) ③参議―ナシ「内」、⑤⑥(左注)―ナシ「内」

宝塔品

尔ソノキマフツセニアリ時ホウタウ仏ホウタウ前有ホウタウ七ホウタウ宝ホウタウ塔ホウタウといふ心を読侍りける

前大僧正慈鎮

目もあやに雲井にそみるいにしへのひしりの住し宿のけしきを

此品を宝塔品と申事は方便品より八品と

きをはつて鷲の御山の空中に五百由旬の

宝塔涌現し給へり是は過去の世に宝浄

世界といふ国に多宝仏と申仏をします

しかるにこの仏大事の因縁なれとも法花

経をとき給はさるゆへにわれ滅度の後全

身を宝塔にいれよ十方彼々の世界に法花

をとかれん所にゆひて証明すへしと誓のへり

いま此品のとき一基の塔婆に乗して湧現

し給ふかゆへに目もあやにとも又いにしへの聖

のやとともいへりあやにとは恠といふ心なり寄 (九・オ)

特の寄の字をよめり

【校異】 (八・オ) ⑧宝塔品 尔ソノトキアツセニアリ時ホウタウ仏ホウタウ前有ホウタウ七ホウタウ宝ホウタウ塔ホウタウといふ心を読侍り

ける―宝塔品「内」、⑨前大僧正―ナシ「内」、(八・ウ) ①(九

・オ) ②(左注)―ナシ「内」

後嵯峨院御製

いにしへもいまもかはらぬ月影を雲のうへにてなかめてしかな

【校異】 (九・オ) ④集付ナシ―続拾遺「内」、④てしかな―せしかな「内」

法性寺入道前関白太政大臣

253 聞人もはるかにこれをあふけとて空にそ法をとく声はせし

多宝仏タホフツの来給ふ故は釈尊シャクソの説法セツポフの真マコト

実マコトにてむなしからすと証明セウメイせむかためなり

されは塔トウの扉ヒラもひらかずして内ウチより大音声ダイオンシヤウ

を出して善哉ゼンサイとて釈迦牟尼世尊シャカニミセソ如所説者ニヨソセツシヤ

皆カク是真実マコトニツととなへ給へり

【校異】 (九・オ) ナシ―宝塔品「内」、⑥集付ナシ―続古今「内」、⑧は

るかに―ひとへに「内」、⑧空にそ―空にも「内」、⑦(九・

ウ) ①(左注)―ナシ「内」

多宝仏を読侍りける

参議雅経

254 ときのへし法の蓮の友なれやいかに契をしき忍ひけむ

多宝仏と釈尊と二仏の契ケイさこそとなりし

き忍ふはしきりに忍ふとなり

【校異】 (九・ウ) ②を讀侍りける―ナシ「内」、③参議雅経―ナシ「内」、

④蓮―筵「内」、⑤⑥(左注)―ナシ「内」

諸宝樹下のこゝろを

前大僧正慈鎮

255 世々をへて木のもとことに散花は久しく匂ふためし成けり

空には宝塔のうちに釈迦多宝の二仏ニブツ並ならびて

座し給へりもろくのうゑ木のもとには釈

尊の十方世界に御身をわけてあまたの仏

と現し給ふも此ときみなわしの御山にきた

(一〇・オ)

りて木のもとに座し給へりそれを久しく
にほふためしといふなり

【校異】 (九・ウ) 諸宝樹下のころを 前大僧正慈鎮一ナシ「内」、⑨世

移ニ 諸 天人
一 代々「内」、⑩「(一〇・オ) ⑤(左注)一ナシ「内」

三度まで移しかへてしおほ空に数かきりなき光をそ見る

分身の諸仏をすへ奉らむかために三度地を

きよめ給へりさて 清浄の地形のうへに

無量の仏たち座し給ふ故にかくいへり

【校異】 (二〇・オ) ⑥移ニ 諸 天人一ナシ「内」、⑦かへてし一かへ

ても「内」、⑧⑩(左注)一ナシ「内」
皆在ニ 虚空ニ

(一〇・ウ)

あまの原思ひかゝらぬ雲の上にまことの道の宿となりぬる

もろくのの仏のすみ家となるといふ事なり

【校異】 (二〇・ウ) ①皆在ニ 虚空ニ一ナシ「内」、②上に一上も「内」「承」、

③(左注)一ナシ「内」

宝塔品のころを

僧都源信

おほ空を手にとる事はやすくとも法に逢ふへき折やなからん

これは法花経とく事かたきをいふとき色々

のかたき事をあけて比量し侍る中に人

あつて手に虚空をにきらむもかたからし

此経をとく事かたしとすといふ心なり

【校異】 (一〇・ウ) ④のころを「内」、⑤僧都源信一前権少僧正源

信「内」、⑦⑩(左注)一ナシ「内」
若 暫 持者 我 則 歡喜の心を

俊成

(一一・オ)

巻くをかされるひもの玉ゆらもたもては仏よろこひ給ふ

法花経をしばらくもたもては仏よろこひ給ふと也

【校異】 (一一・オ) ①若 暫 持者 我 則 歡喜の心を一若暫時者

我即歡喜「内」、④(左注)一ナシ「内」

擔ニ 負 乾草ニ といふころを

前大僧正慈鎮

法のためたとふるわかなたけき火に枯たる草の焼ぬのみかは

是も人あつて劫末の火に枯たる草をおひて

火の中に入たらむにやけさらむもかたしとする

にたらずさて法のためたとふるわかなたけき火のむ

かし法花経を学ひ給ひし時菜をつみ薪を (一一・ウ)

こり給ふ事なりされはたゝ枯たる薪を

おふ心にてそ侍らむなを尋ぬへし

【校異】 (一一・オ) ⑤擔ニ 負 乾草ニ といふころを一ナシ「内」、⑥前

大僧正慈鎮一ナシ「内」、⑦たとふるわかなたけき火に一たとふる

はよなたけき火に「承」、⑦かは一哉「内」、⑧⑩(一一・ウ) ③

(左注)一ナシ「内」

付記 本稿の翻刻については、国文学研究資料館および内閣文庫に御

許可を賜った。ここに深甚の謝意を申し上げる次第である。

(うちの ゆうこ・九州大学大学院博士後期課程)